

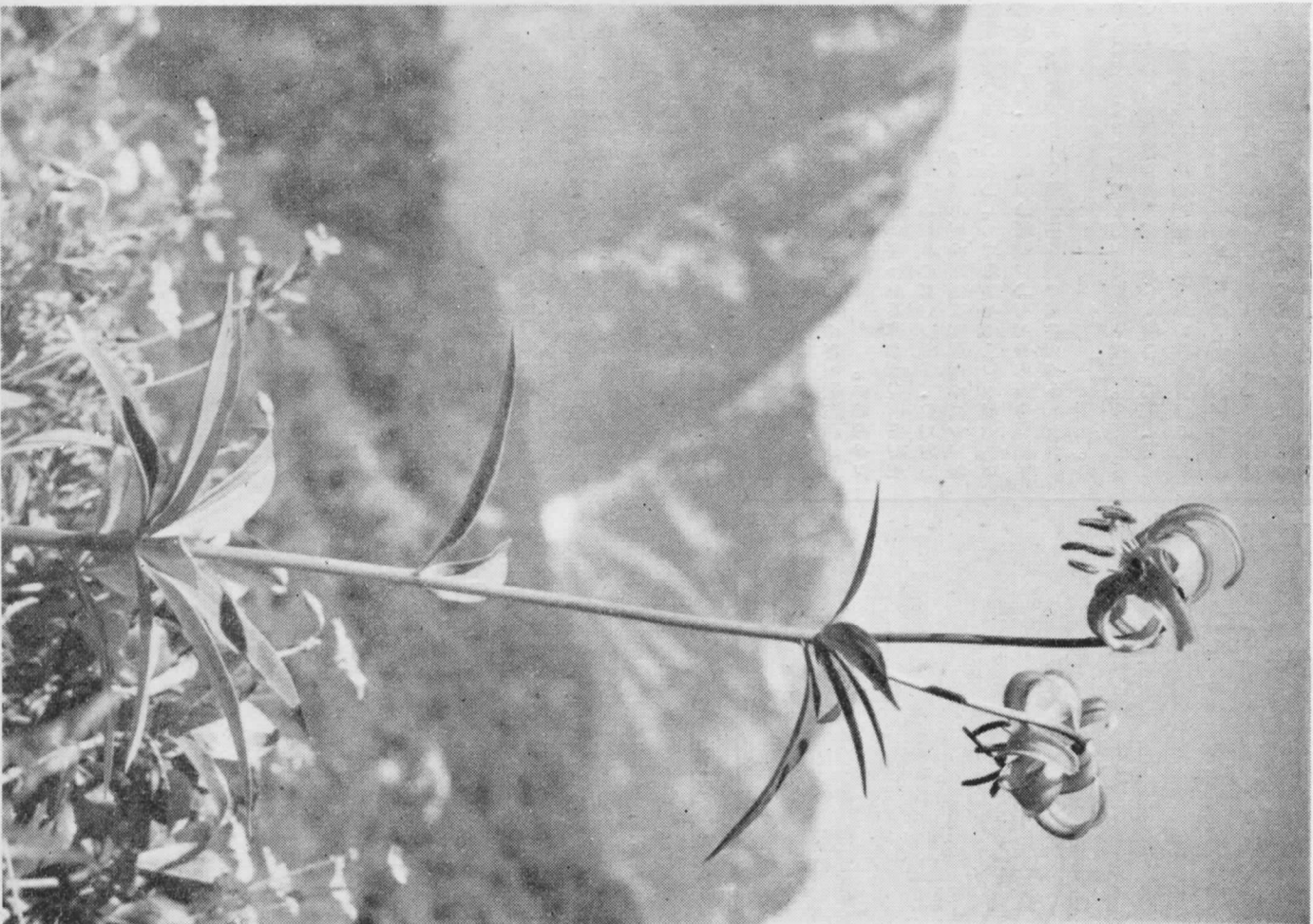
毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

# 山と博物館

第 6 卷 第 9 号

1961年8月25日



ク  
ル  
マ  
ユ  
リ

撮影 高橋秀男

# コマクサ雑記

平林 国男



## 登山ブームと高山生物

近年とみに顕著になって来た登山人口の増加にともなって、遭難事故が続発し、又高山植物の減少や登山道徳の低下などが巷間の話題となっている。

たしかに登山者の受入施設や利用施設、あるいは自然保護のための施設などほとんど昔のまま、何一つ対策がたてられていないところへ最近のように急激に登山者が増加したのでは、自然自体はもちろんのこと、登山する人間にも無理がくるのは当然である。

ところで山麓から山頂まで見かけは連続している高山であるが、低地とは非常に異なった環境条件をもっている。また高山は大洋の中の島のようにそれぞれ孤立してそびえていると考えられ、雲海を大洋の波に見立て、その波間から頭を出している高山が島であると考えられよう。この島にはそれぞれ高山生物が特徴的に出現する。同じ種類でも住んでいたりいなかったり、その島にだけ生育する種類があったり、いずれも高山という環境を生活の場としている。

これら動植物の大部分はいまから100万年前、北半球

をおとすれた氷河期に南下して繁栄した種類であり、氷河期の後退とともに高山に後退してとじこめられたといわれる。こうして彼等の血の中には長い地球の歴史を秘めつつ、氷河時代の遺物として現代に幾多のナゾをなげかける。

高山という孤島に押し寄せる人の波によって、たとえむしりとられたり、殺されたりして直接生命をたたれなくとも、彼等の生活の場は山小屋や登山道など人間の場によって、せはめられて行くことはいなめない。

## コマクサのこと

こうして減少あるいは消滅とさわがれる彼等の姿であるが、どの位の量がいかなる過程で減少するのか全くわからない。研究や調査がそこまで進んでいないわけである。

コマクサもこのような高山生物の一つである。北アでは古老の話をもととして想像して見ると、たしかに昔より少なくなっていると思われる。しかし減少の姿を納得させてくれる説明資料は見あたらない。

そこで、早急にこれら生物の調査が必要となって来るまた地元に住む者がまず取り組みなければならない問題でもあろう。

生態研究となるとひんぱんに登山する必要がある、この点地元の人間は地の利を得ているともいえる。一方山岳博物館ではこのような研究調査はなにより先に手がけて資料を収集し、展示その他の普及教育活動に活用しなければならないのであるが、地財法のとぼっちりか、予算は勿論人員まで減らされて、このような博物館活動として最も地味であるが基礎的な活動が不可能となったこんな状況の時たまたま、長野県でコマクサ保護増殖に関する研究事業が取り上げられ、昨年度より県費によ

第1表コマクサ産地の山岳と地質

中部地方	駒ヶ岳	花崗岩 (古生炭を貫く)	白馬岳	頂上部は古生炭	北麓は石英斑岩	白馬
	ヤリガ岳	古生炭	五竜岳	ひん岩	蓮華岳	花崗岩
	スバリ岳	花崗岩	舟窪岳	不動岳		花崗岩
	餓鬼岳	花崗岩	燕岳	花崗岩	有明山	花崗岩
	大天井岳	花崗岩	横通岳	花崗岩	乗鞍岳	第四紀火山
	御岳	第四紀火山	八ガ岳	第四紀火山	三方ガ岳	第四紀火山
	烏帽子山	第四紀火山	岩管山	第四紀火山	水晶岳	花崗岩
	清水岳	古生炭	本白根山	第四紀火山	鉢ガ岳	古生炭

て調査研究をできるようにしたのはなによりのことである。

### 高山帯のパイオニア

可憐な姿態をもつコマクサは広く世間に知られた花で高山植物の女王といわれるくらいである。ハイマツなどの植物が生育できない高山の砂礫地に生じ、高山帯でも特にきびしい環境を好んで生活の場としているこの植物は女王の貫録充分である。また郡落遷移の初期相に現われると見られ、他の植物が定着できない環境にまっ先進出して勢力をはる。

こうして耕やされた土地には次第に他の高山植物が移住してくる訳であり、いわば高山植物のパイオニアと見ても良からう。

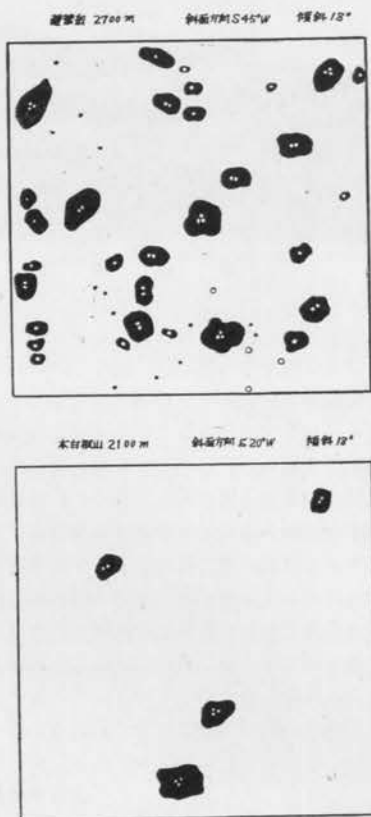
高さは6~20%くらいの小さなもので、淡紅色の花を2~5個ぐらいつける。

地方によってはオコマグサなどとも呼ばれ木曾御岳で有名な漢方薬「お百草」には欠くことのできない植物であったようである。それは成分中にデイセントリンが含まれ鎮静剤としての薬効が認められるためである。

### コマクサの生育地

本州の中部以北の高山から北海道に分布しているコマクサは、国外では南千島のクナシリ、エトロフ両島と樺

第2図 避暑山-本白根山の生育状況 (15g-m)



上 コマクサの蕾 下 花

太南部の高山だけに見られる。ベーリング海沿岸地方にはカラフトコマクサという種類が生育しているが、日本のコマクサはこの種から分派したものと見られ、牧野博士も日本のコマクサを独立した種とせず、カラフトコマクサの変種として学名を与えている。

コマクサの分布地のうち代表的な場所を地図上に入れてみると〔第1図〕理由ははっきりしないのであるが特定の火山脈と深い関係がありそうで面白い。長野県下では飛騨山脈と関東山脈につながる第4紀の比較的新らしい火山群に限られ、これ等新生の火山群では分布の高度が低くなっている。戸隠山や妙高などの火山群も新生の火山であり、生育の条件はそなえているのであるが分布していない。

とにかく長野県下では約2000m以上がコマクサの生育に適する範囲であるといえそうで、この高度以上に生育条件をみだす場所があればコマクサは必ず育つことになる。

現在県下での良い生育地は飛騨山脈に多く、特に後立山連峰の白馬岳、蓮華岳、燕岳などが代表的なものであり、第4紀の火山群では八ヶ岳が代表的な山岳といえる。

### コマクサと人間

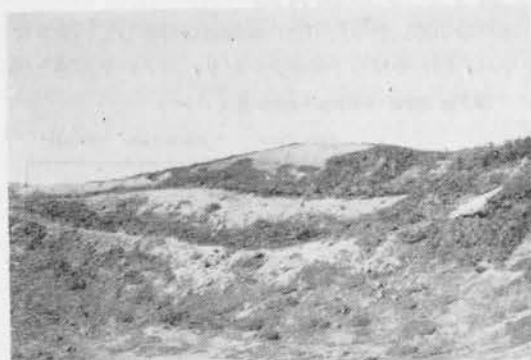
八ヶ岳と同じ第4紀の火山に属する本白根山(群馬県吾妻郡草津町)は古老の話によると昔は見事な群落が見られ、八ヶ岳におとらない豊庫として知られていたよう

であるが、現在では細々としたものである。もつとも白根山は早くから開発された山であり、今日ではケーブルやバス道路が山頂近くまでつけられて、スカート姿の観光客がたくさんおし寄せているのであるが、これが深く関係していると思われる。

本白根山の最も生育の良い場所1㎡内のコマクサ生育状態を蓮華岳（長野県大町市）の1㎡と比較して見ると〔第2図〕株数や葉の地面をおおう面積は本白根山がはるかに劣っている。また種



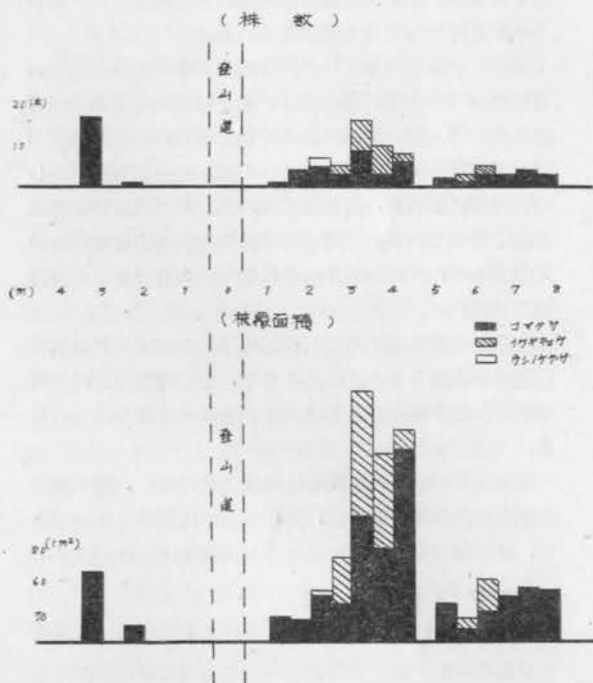
蓮 華 岳



本 白 根 山

(第3図) 登山道附近の生育状況(1)

産芽高 2700 m (St 1)



子から発芽した子葉や子葉からさらに生長が進んだ新葉は本白根山にあつてはほとんど見られない。蓮華岳のコマクサ生育地の一部に登山道がつけられている。

破線部分で傾斜8度の緩斜面であるが、ほぼまんべんなくコマクサが生育している場所である。この場所での登山道を離れるにしたがつて変って行くコマクサの生育状態の一例が〔第3図〕である。これは登山道を中心に両側へ30cmの巾で帯状の調査面積をとってその中で調べたものである。登山道から1mの範囲はコマクサの生育がほとんど見られず登山道から離れると生育が良くなるなどえ道があつても歩行者は路巾からはみだして歩きたがるものであるが、踏みつけによる影響が現われているものと思われる。いったいコマクサはその越冬芽や根茎の形態から踏みつけに対する抵抗力が弱いと考えられるから、せいぜい踏みつけないように願いたいものである

(山博学芸員)

# 窓口の夏山

— 観光案内所から —

中村周一郎

今年の夏山……大町駅前にある観光協会の登山相談所からのぞいた今年の夏山の種々相をちよつとながめてみようか。

数の上ではお盆までに山に入った登山者の数は、昨年より八分増しというところであろう。レジャー時代という予告編があったので二割くらいの増加を見込んでいたが予想は裏切られた。

大町市で行った山開きが六月二十三日、このころから天候が崩れて、七月上旬は雨の日が多かった。集中豪雨で、あちこちらに被害が続出、山行は完全に出足をくじかれた形だった。それにしてもあの豪雨を犯して山に入ったパーティーも幾組があつて、遭難寸前で協会に飛び込んできた者もあったが幸いに大した事故のなかったことは幸先きがよかった。

大町口から高瀬入、鹿島入、龍川入りと、この三本のルートに沿って入山した登山者の総計がお盆までに約一万五千人ほどであった。八月中には二万を越すと思う。圧倒的に多かったのは高瀬入り、次で龍川入りの針ノ木鹿島槍は下山者の数に比べて大町口からの入山者は比較的少いのが夏山の持長である。

高瀬入りを登る者の中大多数は烏帽子経由、三俣蓮華槍ヶ岳あるいは徳高、次いで湯股温泉から伊藤新道を登っていきなり三俣蓮華えとつづく者、さらに水股川から千丈沢をつめて西鎌尾根、槍、ごく少数は千天出合いから天上沢に入り北鎌尾根を経て槍といったあんばいである。

登山客の方面別を見ると関東、京浜方面からのものが圧倒的で六割に近い、関西、阪神方面が約二割、中京一割、その他北陸、九州、東北、北海道、四国などで、遠く北海道から来たものが十二人、四国からは八人、九州からは七十一人がはるばる大町の土を踏んで山入りをしている。

今年の傾向としていちぢるしく変わった現象は「雲の平」を目的に行く登山者の激増したことだった。シーズン前に、雲の平に小屋が出来たと宣伝されたため、あの別天地で都廳を避けようというための増加と思われるのだが、あにはからんや、その雲の平の小屋は前年の雪で倒壊、使用に堪えなくなっていたのが山開き直前になってわかった。経営者伊藤正一氏がこの情報にギョウ天、ただちに人手をかり集めて突貫工事で復旧工事にとりかかったが、例の集中豪雨の影響を受けて遅々としてはかどらず、どうにかこうにか十五人くらいの収容が可能になったのがお盆過ぎであった。このために小屋をあてにして来た登山者は協会前で急遽目的を変更したり「宣伝に偽りがある」といってドナー者などで大部トラブルがあ

つたが事情を聞いて納得してくれたのでまづはヤレヤレというところだった。

一日に大体二百人から三百五十人づつが大町口から三本のルートを伝って入山している。手許にある資料によると七月一日から十日ごろまでは極めて低調であるが十日過ぎになるとカーブは急上昇する。そして七月末にピークを迎える。去年の夏は七月三十一日が最高で五百十人ほどが入った。今年は七月三十日の六百八十人、いづれも日曜にあたっている日だ。そしてこのカーブは8月へ入って順次下降しはじめてシーズンオフとなるのだが今年は8月へ入っても去年ほどの下降線をたどらず相当の強い線を出していたのは天候不順のいたづらだったかも知れない。白馬岳を対照とする四ツ谷駅は盛期は毎朝1,500から2,000人もの登山客が殺到しているが、集団登山に適さない山々をもっている大町としてはゴマメのはぎりしりでしかない。

それにしても往年白馬岳登山者がすべて大町駅下車、こゝからバスで行った当時のことを思うと、今の有様は考えようによっては東京、大阪からの四ツ谷駅直通列車乗り入れはうらめしいような気がする。

案内所の窓口を訪れる登山者が、ときどき珍妙な地名を持ち込んで来て係をマゴツカせることがある。湯股温泉を「ユノマダ温泉」と呼ぶ程度や七倉を「シチクラ」というくらいはまあいいとして葛温泉を「ツタ温泉」といってくる者が1日に3人や4人はザラにあるから、慣れるまでは骨が折れる、ヒドイのになると「レイチゴヤ」へ行くにはオオヤハラから入るのがいいかセンザワから入るのがいいか、どっちだ」とくる。この答を出すのに七分かった。つまり「冷池小屋(ツメタイケ小屋)へ行くには大谷原(オオタニハラ)から入るのがいいか扇沢(オオギザワ)から入るのがいいか」という意味である。字で書いてみるとなんでもないことだが、これが他国の妙なアクセントでこのような質問を受けると「この人は目的地をトツチがへて来ているのではないか」としばし思案に暮れることがある。白馬岳へ行く登山客がバスの案内を求めてくる。猿倉行のバスがなくてつぎに小谷温泉行きがある場合、「オタリ温泉行で行って四谷で猿倉行に乗替えて下さい」と案内する。するとその客が小谷温泉行のバスの出たあとで「オタリ温泉行などというバスは全然来なかった。嘘をつくな」といって努鳴り込んで来るから仕末が悪い。駅の阿部番与氏も言っているが、観光宣伝上地名にフリガナをつけることの要件はこのような例を見ても極めて大切なことである。

(観光協会主任)

## ナミダタケ

平林昭一郎

「ヤア、これはえらいことだ。白いカビが雪のように拡っている。誰か来て見ておくれ。」去る3月下旬の午後、事務室隣りの会議室で床を修理中の大工の声である。突然の声に驚き急いで行き2m四方にあけられた床下をのそくと二度びっくりした。なるほど白いカビが一面に拡っていて、その状態はむしろきれいな位だ。内心これが木材腐朽菌中、その害がもっとも猛烈なため恐れられている「ナミダタケ」ではないかと思ひ、さっそくクモの巣を払い床下にもぐりこむ。なま暖かい風が頬に感じ、同時に床下特有の臭が鼻をつく。菌糸の発生している範囲は2m×3mで、その中心部はちょうど白いじゅうたんを敷きつめたようだ。手を当ててみると軟かく肉質で湿っており、やゝ弾力がある。ところどころ表面に水滴があり、外気に照らされ怪しく光っている。勢いのあまった菌糸は中心部の土面からさらに拡って、基礎の大きい石をのほり塚を通り根ガラミ、根太(ネダ)、土台、そうして遂に床板まで達している。そのため4本の塚(1本が15%角)のうち2本が完全に犯され濃褐色に変色しボロボロに腐っており、下方は中吊りで基礎石との隙が3%にもなっている。残る2本は黄褐色となりかろうじて押し立っている状態だ。

大工の作業予定もあり、一通り観察し、標本にするため中心部の一部を採集。急ぎはい上り調べる。間違いなく「ナミダタケ」である。備えつけのカメラが今日に限って貸出しておりいかにも残念だ。居合せた館員と相談し大工達の応援を求め朽ちた木材を取り除き、クレオソート(防腐剤)を多量に撒布する。

本館は今から4年前、当時大町南高校の校舎だったものを払い下げていただき現在の場所に移築したばかりである。移築の際木材は厳重に検査したがその大半は実に立派なもので殆ど補強材は使われなかった。特に周囲の基礎は見事な花崗石を使い4mに1つの割合に床下通風窓がつくられておりました。床下の地面から床板まで平均1mの空間が保たれている。従って「ナミダタケ」の入りこむ余地が全然ないわけである。……が、一通り館の周囲を廻って見ると床下通風窓の入口の半数以上が落葉、枯草、土等により塞がれていることを発見した。市街地に比べ山麓の樹林中にあるため一般に平均湿度が高く、恐らく通風窓から侵入した菌糸が窓口の閉さにより床下内部が適温、適湿度の状態になりこのため急速に発達したのではないかと考えられる。以下順を追って「ナミダタケ」について解説しよう。

分類 担子菌類—同担子菌亜綱—菌類—ヒダナシダ

ケ目—イドタケ科—ナミダタケ属—ナミダタケ

形態 菌糸は厚く、扁平に伸び軟かい皮状をなし、じゅうたんを敷いた観がある。白色で軟かく、肉質で湿っている。中央部はやゝ厚く結実の部分となり、黄褐色、赤褐色、黒褐色等の色に変わり、乾くともろい革質となる。その部分は直径8~15%,厚さ約5%位、表面にはちりめんじわ状の隆起を生じ、径1~2%,深さ約0.5~1%の多数の痘痕状窪みをつくり、その中に子実層が発達して無数の胞子ができる。胞子ができる。胞子の大きさは7~10×5~6V,た円形、平滑、色は顕鏡するとレモン黄色、多数推積すると肉眼では赤褐色にそれぞれ見える。

生態 野外では多く横に倒れた松の樹幹につき、家屋では最もよく床下に繁殖する。発育の盛んな時は表面に点々と無色透明な水滴を分泌する。これがため「ナミダタケ」(涙菌)と呼ばれる。諸種の木材腐朽菌中、害が最も強く、木材の内部に深く菌糸を侵入せしめ材質の腐朽が極めて速い。気温19°C前後、湿度70%以上の状態が永く続くと菌糸の発育が強くなる。我国は特に初夏および秋は空気が湿っており比較的この状態が永く続くため犯されやすい。これに反し欧米諸国では空気が一年中乾きがちで、殊に春から秋にかけ最も乾燥するため被害はごく少い。

分布 日本(北海道、本州、九州) 欧州、北米、シベリヤ、豪州

被害例 本菌の被害を受けた例は非常に多い。その一例として、本県上水内郡高岡村小学校校舎は明治20年に建築されその後20年間被害をみなかった。明治43年校舎増築のため校地の改修、地盤の土盛りをした際床下の通風窓が閉塞されたのに気づかずいた。ところが3年後に床板の継目から菌が伸長し広範囲にわたり被害があった。また上田蚕糸専門学校(今の信大繊維学部)は建築後5年にして早くもこのような被害をみた。

防除法 1, 建築前に木材を検査し、腐朽初期の変色部のあるものは使用しない。2, 十分に乾燥した木材を使用し、工事中地面の上に直接置かない。3, 床下に塩化亜鉛、クレオソート等の防腐剤を撒布する。4, 床下地面と床板との間の通風を充分注意する。5, 床下地面の近くに使用する様には防腐剤を塗布または注入する。6, 本菌が発生したら、早目に被害材のほか附近の板、土等を全部除去し更新する。7, 被害を受けた木材は必ず焼却する。(引用文献「木材腐朽菌学」「原色日本菌類図鑑、川村清一著」「同、今関六也他著」)

(山博学芸員)

## 国民大育大会登山部門

## 長野県予選会に出場して

武田 睦男

国民大育大会登山部門での各県予選会は、ほとんどが日本山岳連盟の中の各県山岳連盟が実行しているが、長野県の場合は山岳連盟が出来ていなかった為に日本山岳会信濃支部の手で実施されて来た。しかし今年度からは今春結成された、長野県山岳連盟と信濃山の会との三者で作られた、山岳協会として行うことになった。

今年は山岳協会結成が大部遅れたので今迄の実績のある、信濃支部が実行にあたり、去る19日～21日の三日間燕岳～大天井岳に於いて行なわれた。

8月19日 くもり後にわか雨

大町発12時17分発の電車で穂高駅下車、会場の穂高神社に着くと、すでに役員や選手のほとんどが来ており我々は一番最後であった。すぐに神社祭壇前にて神事が行なわれ、続いて開会式が始められた。大会長、実行委員長挨拶、技術委員長の注意を以て開会式を終る。この頃より懸念された雨が降り出し先が案じられる。三台のバスに分乗して有明温泉(中房温泉の下方、町営の温泉)に着き、登山の注意等があつて学術試験が行なわれた問題は山の常識問題で普段の勉強で充分出来る問題であった。終つて夕食、入浴も自由ということであつたが明日の登山のため早く就寝する。

8月20日 くもりのち雨

昨日の天気図では今日も天気はよくなさそうである。出発は7時、40数名の選手を9班に分け、3分間隔で出発する。行動は班毎に行うことになり、我々(山の会3名)は波田山岳会の2人のパーティと班を組み、4番目に出発する。中房温泉のキャンプ場には最盛期も過ぎたとはいえ、幾つものテントがあちこちに並んでいる。登りにかゝりペースをゆっくりに落す。各選手とも予選会のせいか大部速いペースで登って行く、なにか登山競走(速さくらべ)のような感じさえる。

しばらく登ると登山者も大部増えて来て我々をどんどん追越して行く。登山競技では学科試験と実地試験があり、登山中は実地の問題になる。歩行或は登山中のあらゆる判断などが審査される対称となる。途中数ヶ所に審査員がいて、登山に関するあらゆる質問がされる。合戦小屋で軽い昼食をとり燕山荘まで登る、稜線は霧がかゝ

つてきて視界は全然きかなく、小雨さえ降り出してきた燕岳頂上は天候がよければ往復するというのであつたが、本部よりの指示でとり止めにする。12時燕山荘を後にアルプス銀座を大天井岳へと向う、霧が風に吹き上げられて、ほゝを冷くさすつていく、蛙岩を過ぎてしばらく行くと稜線風下側に審査員がおり一人一人に質問をしている、時間をかけて聞いているので大部待たされる、雨もまたひとしきり降り出し雨具をつける。質問も終つて天候も悪いのでピッチを上げる。切通岩の悪場を越すとあとは大天井迄登にかゝる。他のパーティとも大部おくれて小屋に着くとすでに皆きめられた場所に思い思いの姿勢で過している。

天気図ではまだ前線の停滞を示しているのでまだわるいだろう。

8月21日 雨のちくもり

小屋を出発してまもなくまた雨が降り出して来た。大した雨でもないが雨具をつけて昨日の路を燕山荘へと向う、1時間半で燕山荘に着く大部ピッチを上げたものだ燕山荘で本部の指示で休んでいると雨も上りときどき青空も見え、槍ヶ岳や笠、裏銀座の山々も望見することも出来て、雨の上つたことを示している。8時半頃燕山荘より今朝の出発順に有明温泉へと下る、途中2つの中学生の団体に会う、地元の中学生の集団登山だそうである。今日は審査もないようだ。のんびりとした気持ちで歩くことが出来た。有明温泉で昼食を取り、温泉につかつて穂高町へバスに分乗して帰る。

神社の前で閉会式を行い、実行委員長、審査委員長の講評があつて三日間の幕を閉じた。

登山の競技は他のスポーツとは全然異つている。他のスポーツでは勝つ事のみであるが登山では早いばかりがよいのではない。山へ登るためには体力の配分を考えた、パーティとしてのリーダー・シップとメンバー・シップなどが強調されるし、また学術的な知識も当然必要になってくるのであるから、普段の山行あるいは机上での勉強がなされていなければならない。そこにこそ初めて選ばれる資格がそなわつてくるのではないだろうか。

(山博調査員)

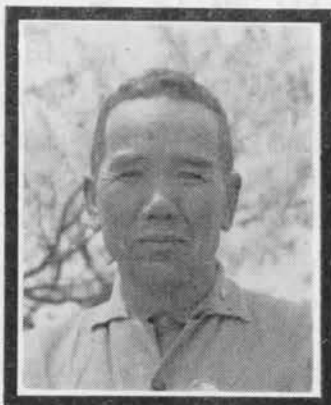
## 博物館だより

## 神社唯七さん逝く

≪動物園のおじさん≫として市民小中学生、登山者から親しまれていた神社さんが去る八月十日脳出血の為亡くなられた。

昭和33年4月から山岳博物館の動植物園管理係として≪天然記念物カモシカ≫オオハク

チョウなどむづかしい動物を手かけて来た功績は高く評価されおしまれる。 近年57才



## カモシカ≪房子≫死ぬ

付属動物園で飼育されていた2頭のカモシカのうちの1頭≪房子≫が去る7月31日死んだ。腸カタルと飼育舎の熱気が原因であった。

昭和33年8月、燕岳へ登る途中の中房温泉で保護されたものをゆずっていたいただいたものである。今度剥製として本館の観覧者に供せられることになっている。

## ガイド・ブック

## 「白馬と鹿島槍」

実業の日本社から出版

博物館の学芸員や調査員、山の会員らで組織している大町山岳研究会の手によって「白馬・後立山連峯」のガイドブックが出版された。これは実業の日本社の企画による「ブルーガイドボックス」の一巻を担当したもので8月初旬「白馬と鹿島槍」として、全国の書店から発売された。

とかくガイドブックといえは登山コースのみに関するものが多く味気のないもの、しかも直接登山の計画に必要なようになってから始めて聞くもので、本書はその点山に登れない方が読んでも楽しいようにまとめられている。

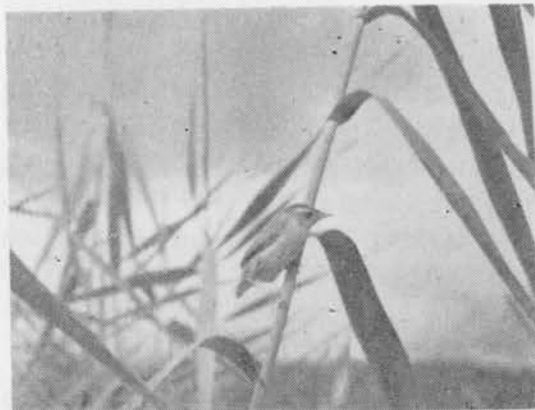
山麓の風物史、山麓から眺める山、温泉、ハイキングスキー場などを始め、烏帽子岳以北に連なる山々の登山コースについて、くわしい地図と豊富な写真によって解説してあり、最も手頃な新しい線合案内書といえよう

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料200円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

## コヨシキリの二番雛

長沢 修介

来る日も来る日も朝から晩まで嘯り続けて、一頃は夜も眠らず嘯っていたオオヨシキリの声も、もうすっかり聞かれなくなってしまい今はこのヨシ原もしんと静まり返り、たまに風が吹いてヨシの葉と葉のささやきがかすかに聞えるばかりになってしまった。もうほとんどのオオヨシキリも巣立ってしまったのだらう。まれに思い出した様に嘯ってみたが、もうすっかり喉がつぶれてしまって今にもガツと血でも吐き出しそうな暖れ声になってしまった。そんなオオヨシキリの巢の御にこれは一まわり小さいコヨシキリがまだ巣立ったばかりの姿でヨシからヨシを渡り歩いていた。でも始めて見る世界は面白くて仕方がないといった様子だ。照りつける日射しは夏の姿であってもヨシの梢を渡る風はもう秋の近いことを告げ、葉のささやきは「急ぎなさい。さもないとあなたは南へ渡ることが出来ませんよ」とささやいている。恐らく何かの事故で一回目の巢が失敗して二回目の巢のヒナであろう。もうわずしかかない秋の訪れの前にこのヒナはすっかり成長出来るだろうか、私はすっかり成長することを祈ってそっとそばを離れた。



## 資料寄贈

岳友No61 岳友クラブ、会報No14 雪標山岳会、朝霧No180~182 東京朝霧山岳会、四つはし2, 5 大阪市立電気科学館、千葉生物誌No11.1 千葉県生物学会 山毛樺林No61 広島山の会、東斐月報No36~37 東斐山岳会、地質ニュースNo81 地質調査所、ハイカーNo69 山と溪谷社、長野県山岳連盟報No1 長野県山岳連盟、京都山岳61~7京都山岳会、(敬称略)

山と博物館 第6巻第9号 1961年8月25日発行  
発行所 長野県大町市TEL(大町)211  
大町山岳博物館  
印刷所 大町市上中町  
信州印刷大町工場